

## B-62 織物のしわ形態と光反射法による評価

愛知教育大 ○日下部信幸 奈良女子大家政 古里孝吉

目的. 被服に生ずるしわは、着用しわのように主として折れ状しわや縫い目の剪断しわのような波状しわであるが、洗たくによつて生ずるしわは折れ状、サッカーリー状、波状、シボ状しわやこれら複合して複雑なしわが多い。洗たくしわの評価は標準レプリカ等による肉眼法によつて行われる場合が多いが、これは比較的折れ状しわの多少によつて等級分けが行つていいと考えられる。しかししながら、織種によつては折れ状しわのみでなく、波状しわやサッカーリー状しわなども発生するので、しわ形態が著しく異なる場合のしわ評価も必要である。そこで、形態の異なるしわ状表面を光反射法によつてしわを数値化し、官能量との関係を検討した。

方法. 用いたしわ形態は折れ状しわ、サッカーリー状しわ、波状しわ、シボ状しわで、折れ状しわではしわの大小と多少を考慮して6種類である。官能検査はBradleyの方法で逐次近似法により尺度化した。しわ状表面の数値化は反射しわ曲線から変動係数CV、曲線の長さL、しわ山の高さH<sub>m</sub>を求めた。

結果. 肉眼法では、折れ状しわが目立ち、その多少よりも鋭く大きいものがしわとして知覚されるようであり、波状しわやシボ状しわは目立たない。光反射法によるしわの評価値のうち、変動係数およびしわ山の高さと肉眼法による官能量と高い相関が得られだが、曲線の長さとは相関が認められない。これは、官能量と変動係数およびしわ山の高さがしわの大きさに最も関係しているからだと考えられる。